

## 「子供たちの未来づくり」14

## 映画「みんなの学校」

延岡シネマで、「みんなの学校」という映画をみた。

大阪市立「大空小学校」という児童数200人余りの学校を舞台にしたドキュメンタリーだった。

ここでは、不登校ゼロをめざし、特別支援が必要な子ども、自分の気持ちをうまくコントロールできない子ども、みんな同じ教室で学ぶ。

学校では日々、様々な出来事が連続して起こる。すぐに教室を飛び出してしまふ子、つい友達に暴力をふるってしまふ子…しかし、先生たちは決して落ち込んでいないし、あきらめない。事務の先生までもが、始業時刻に学校にこない子供の家まで自転車を走らせる。校長を先頭に先生方のチームワークが素晴らしい。経験の浅い先生に、その若い先生は真剣に悩む。しかし、ベテランの先生たちがさりげなく見守ってくれる。決して一人で背負いこまなくていい、この学校では先生たちみんなが仲間で、助け合っていくんだからと、心を込めた言葉をかける。

その場面はとても感動的だった。先生自身が、このように人間的に成長していく姿は、そのまま子供たちにも伝わっていく。

自分とは違った能力や性格や考えを持つ仲間と触れ合うことで、子供たちが



自らで気付く。

多様な価値観と交わることで、人と助け合うことの大切さを学びとる。自分の力を伸ばすことだけでなく、人を支えることの大切さに気付く。

この学校では、子供たちと先生だけでなく、保護者や地域の人々が一緒になって「だれもが通い続けることができる学校」を作り上げてきた。その結果、「地域が変わる」という。助けが必要な子と関わることで、周りの子供たちが気付き育つ。そしてその保護者が変わる。そうすれば、その周りの地域も変わるというのだ。地域にとっても「自分とは違う隣人」が抱える問題をお互いに思いやる力が培われる、という言葉に私は大きな衝撃を受けた。地域の人々が学校に関わるということは、何も子供たちのためだけではなかった、地域に住む一人一人のためでもあったのだということに気付いた瞬間だった。

文/日向市キャリア教育支援センター長

水永 正憲

